

縦書きが「亡びるとき」

長谷川 修

「書こう会」の文章は縦書きで提出するとの制約があるが、縦書きはどうも苦手だ。会社では横書きが一般的だったうえに退職後は文章作成に専らパソコンを使用しているからか、日頃は慶弔の手紙以外全て横書きの生活だ。縦書きと言っても横書きの草稿を自動変換するだけだと思われるかもしれないが、漢数字と算用数字の使い分けや英語の表示に悩むし、箇条書きにした例示や列挙は横書きでは気にならないのに縦書きでは気になる。端的に言って、気楽に速く書ける横書きに対し縦書きではそうはいかない。

自分の慣れはともかく縦書きと横書きの違いを考えてみよう。横書きはビジネス文や自然科学書のような数字が多く乾いた文章に適するが、縦書きは文芸作品のような余情を込めた文や潤いのある文に必然だ。カルチャーセンターの作文教室では、横に書いた文を縦に変えるだけでも文章の感じが変わると、多くの講師は提出文を縦書きに限定する。また、パソコンを使った横書きは便利な反面、乱雑な文や文体を軽視あるいは無視した文に陥る危険性がある。筆者の場合もつい句読点や改行が多くなり、文が途切れ途切れになりがちだ。

縦書き文章と横書き文章を流通量で見ると、活字媒体では、新聞や雑誌、書籍にみるように縦書きが多い（教科書だけは比率が逆転し、国語のみが縦書きでその他の教科は全て横書き）が、デジタル媒体ではほとんどが横書きだ。近年は活字媒体の衰退に対しデジタル媒体は益々隆盛であり、縦書きと横書きの流通量の差は開く一方だ。二十一世紀の若者は子供の時から横書きやスマホに馴染んでおり、いずれ活字媒体も横書きに替わる日が予想される。

水村美苗さんは文学エッセイ『日本語が亡びるとき』で、米国英語が席捲するなかローカル語（話し言葉）としての日本語はなくならないが、国語（書き言葉）としての日本語は亡びると憂えた。筆者もデジタル化の進展に伴い、縦書きの味わって読む文章が亡びるのを淋しく思う。